

目 次

「鑑賞者研究プロジェクト」と「ACOP」について 福のり子	2
2005 年度鑑賞者／学生アンケート集計抜粋	10
学生アンケート抜粋	12
プロジェクト参加者寄稿（寺川貴也／越野清実／松村一樹／池田真規子／村山美希）	25
鑑賞者アンケート	35
1. 初回アンケート質問項目	35
2. 初回アンケート集計	39
3. 最終アンケート質問項目	50
4. 最終アンケート集計	52
5. 鑑賞者アンケート分析	60
学生アンケート	67
1. 学生アンケート質問項目	67
2. 学生アンケート全回答	70
ACOP 2 年目のプロジェクト：学生レポート（抜粋）	207
衣笠小学校 ACOP・最終アンケート集計	212
アメリカ・アレナス氏インタビュー	215
鑑賞者研究プロジェクト取材記事	218

付録 CD-ROM 目次

鑑賞者初回アンケート集計
鑑賞者最終アンケート集計
グループ 1 鑑賞会感想
グループ 2 鑑賞会感想
グループ 3 鑑賞会感想
グループ 4 鑑賞会感想
衣笠小学校第 1 回 ACOP 感想
衣笠小学校第 2 回 ACOP 感想
衣笠小学校第 3 回 ACOP 感想
衣笠小学校 ACOP 最終アンケート

（ファイルはすべて PDF 形式です）

「鑑賞者研究プロジェクト」と「ACOP」について

(1) はじめに

京都造形芸術大学芸術表現・アートプロデュース学科では、2004年度春から「鑑賞者研究プロジェクト」を行っている。これは「芸術表現演習」の科目を履修する1回生を中心とする学生を対象に、年間をとおして行われるプロジェクトで、以下がその目的である¹。

- 1) アートとアート作品の違いを学ぶ。アートはコミュニケーションであることを理解し、アートが生まれるためには「人」が必要であることを知る。
- 2) 将来アート界で働きたいと希望している学生たちに、鑑賞者の存在の重要性と、彼らの不安、不満、そしてニーズなどを把握させる。
- 3) 「作品」と「観客」のあいだにより密接なコミュニケーションを確立するため、両者を結ぶファシリテーターの重要性を、実践をとおして学ぶ。

2005年度も同様の目的をもってこのプロジェクトを実施した。これはその報告書である。目的は昨年と同様であるが、2年目の今年は「鑑賞者研究プロジェクト」という名前ではなく、「Art Communication Project (ACOP)」という名称を用いることにした。

2004年度の「鑑賞者研究プロジェクト」に参加した学生は、今年は2回生となった。彼らをナビゲイターとしてさらに育成していくため、学内で学んだことを実社会で検証するため、そして本プロジェクトの中核をなす対話型鑑賞方法の意義や問題点をさらに明らかにするためにも、彼らが学外で実践できるプロジェクトをいくつか立ち上げることにした。これらのプロジェクトのなかには、「鑑賞者研究」だけではない、もっと広範囲な目的と要素を持ち合わせたものもある。それらすべてを「鑑賞者研究」という名で呼ぶことが混乱をきたすことも予想された。加えて、いざ社会にでて活動を始めると、「鑑賞者研究プロジェクト」では、固い感じがするだけではなく、なによりも言いにくい。もっと親しみやすく、呼びやすい名称をと考えていたとき、昨年このプロジェクトに参加したある学生が、「ACOP」(「エイコップ」と発音する)という名称を提案してくれた。そしてその場にいた学生の全員一致でこの名称を採択することにしたのである。

本プロジェクトはグループで作品をみながら、それぞれが思ったことや感じたこと、あるいは疑問点などを話していくという対話型作品鑑賞方法を基本としている。「アートは難しい」と敬遠している多くの鑑賞者(とくに初心者の人たち)にとって、対話型鑑賞方法はひとつの有効な鑑賞方法であるという前提にたって始められたプロジェクトである。対話とは文字通りコミュニケーションであり、さらに「アートはコミュニケーションである」と常々思っている私としては、ACOPはこのプロジェクトを表すのにとっても適切な名称であると思っている。

もうひとつ、名称を変更して良かったと思うことがある。「鑑賞者」という言葉を聞けば、私たちは、例えば美術館にやって来る人たちのことを想像してしまう。すると自ずと「来館者(素人):美術館関係者(専門家)」という図式ができあがる。この図式の裏には専門家が素人に知識を教えるという、従来型の一方通行の教育観が見え隠れしてしまうのだ。しかし本来は、ナビゲイターも学芸員も研究者も、つまり作品をみるすべての人たちが「鑑賞者」なのである。その道のプロにとって、どこか「他者」のこのように聞こえる「鑑賞者」を本プロジェクトの名称に用いるのではなく、「コ

¹ 詳細は、『2004年度鑑賞者研究プロジェクト報告書』(以下、2004年度報告書)P2参照。

コミュニケーション」を全面に出すことで、例えば、違いを認め合った上で、共感し合いながら支援するというような、より人間的な関係性が築きあげられるのではないかと思うからだ。

(2) 活動報告

(中略。詳しくは本書参照。)

(3) アンケート

(中略。詳しくは本書参照。)

(4) まとめ

1 : ACOP 症候群について

(中略。詳しくは本書参照。)

2 : 対話型鑑賞方法は日本人には不向きか？

(中略。詳しくは本書参照。)

3 : 「言葉の力」「みる力」

(中略。詳しくは本書参照。)

(5) 謝辞

「本来ならば鑑賞者の方々が何か新しい発見を得るべきなのかもしれませんが、実際には我々学生の方がみなさんのおかげで多くのことを発見し学びました。」ある学生の言葉である。ACOPのために、ボランティアで遠路はるばるお越しいただいた鑑賞者の皆様に心からお礼を申し上げたい。このプロジェクトは机上の学習だけではなく、「体験」が重要な意味を持っている。言葉で学んだことは、実践をとおして確認され、ときには考察を重ねて軌道修正することで、より確実に身に付くものとなっていくのだ。皆様のおかげで学生たちはすばらしい「体験」をさせていただいた。暖かい眼差しと、ときには厳しい激励は、学生たちにとってかけがえのない思い出になるだろう。

(以下、省略。詳しくは本書参照。)

京都造形芸術大学芸術表現・アートプロデュース学科

福 のり子

2006年5月